

## 国語 (その一)

**第一問** 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

今、若い科学者はさまざまな岐路にさしかかっている。

かつては、自らの好奇心の赴くままに自由に研究に勤しむことができた。「文化の担い手」という誇りと<sup>A</sup>氣概が科学者の心を支えていたのだ。変人とは思われたけれど、「何かかけがえのない大事な仕事をしているらしい」と捉える世間の目も暖かかった。一種の高等遊民的な地位、社会のエリートとして自他ともに認める存在であったと言える。「科学のための科学」に邁進<sup>まいしん</sup>すればよかったのだ。

しかし、社会における科学や科学者に対する視点が変わってきた。まず、科学が文化のみに寄与するのではなく、人々の生活に大きな影響を与えることに気づかれるようになったことがある。その嚆矢<sup>こうし</sup>は原爆の開発であろう。科学は、人間にとって好都合な側面だけでなく、余計なものをも生み出す魔力を秘めていることがはつきりと認識されたのだ。そして、周りを見渡してみれば、科学の成果が社会に実に多くの恩恵をもたらしてきたことを認めつつも、科学がもたらした害悪にも目を向けざるを得なくなった。科学は両刃の刃であることを人々が知ったのである。

その結果、「社会のための科学」が強調

されるようになった。社会に円滑に受容され、生産や生活に役立つ科学というわけである。その意味では、科学の社会的意義を深く吟味することが求められ（実際に「科学社会学」という研究分野が拓<sup>ひら</sup>かれた）、現代文明を支える重要な要素として科学を捉え直す作業が必須となっている。社会的な視野を持った科学者が求められるようになってきているのだ。<sup>B</sup>科学研究のみに埋没できた旧時代の科学者像から社会と切り結ぶ新時代の科学者像へと、大きく転回しつつある時期を迎えていると言える。特に若い科学者にそれが期待されているのである。

他方、社会の生産力や効率性の追求における科学の力が高く評価されるにつれ、科学を国家の制度として取り込み、意のままに制御しようという動きも強くなった。国家による科学研究のための資金援助は年々増大し、科学者の数は三〇年で二倍ずつ増加している。科学者は、ごく普通の人間が選り取る職業の一つになりつつあるのだ。とはいえ、多くの専門的訓練を必要とし、一般の人々には知り得ない知識を有するという点ではプロフェッショナル（専門職）の地位も保ってはいる。言い換えれば、科学者は、専門の分野におけるエリート的な地位にありつつも、専門から一歩外れると一市民に過ぎないというアンビバレントな存在となりつつあるとも言えよう。

## 国語 (その二)

そのような科学者の社会的地位の変化があるためか、社会の動向について批判的な発言をする科学者がめっきり減ってしまった。かつて湯川秀樹などの科学者が核兵器廃絶運動を牽引したのだが、今やその影すらない状態である。当時に比べて現代は、地球環境問題、遺伝子操作の可否、IT社会の未来など、科学者が社会に伝え共に考えるべき課題がより多く山積しているというのに、社会に密接した科学者が数えるほどしかない。科学者の数は増加したが、その存在感は薄れている状態なのである。その責めの多くはシニアの研究者(私も含めて)が負わねばならない。

その背景には、科学研究の現場に「経済論理」と「競争原理」が持ち込まれ、研究以外の事柄に興味を示す余裕を失っていることがある。「経済論理」とは、ひたすら業績を上げることが強く要請され、それに応じて研究費の配分がなされるようになったことだ。自由に使える経常研究費が極端に絞られ、「競争的資金」と呼ばれる公募制の補助金を稼がねば研究が続けることができなくなっている。そして、「競争的資金」を獲得するためには継続的に論文を発表していなければならず、業績至上主義に走らざるを得なくなった。ひたすら、競争して勝たねばならないのだ。それによって、社会的な事象に気を払っていない暇はないと思ひ込んでしまった。

現代が熾烈な競争社会になっているのだから、科学者の世界も例外ではなく競争原理は当然、と思われるかもしれない。しかし、果たしてそれが何をもたらすかをじっくり考えてみる必要があるだろう。その悪弊として、データの捏造など科学者の不正行為が続々と摘発されていることが挙げられる。それは科学者が競争原理に追い詰められた結果ではないだろうか。業績を挙げねばならないという強迫意識が「イ」を打ってしまうのだ。(といっても、私がかれらを庇っているわけではない。倫理感を喪失した科学者は、科学者の名に値しないからだ。)

より深刻な問題は、視野が近視眼的になり、遠大な構想で大きな花を咲かせるような研究が立ち枯れていくことである。そんな長期的な研究では手っ取り早く論文が書けるわけではないので、現在のシステムでは落ちこぼれてしまうのだ。特に、若い研究者の冒險的な仕事芽を出さなくなる危険性がある。世間並みの平凡な論文を数多く稼ぐことのみが習性になってしまいかねないからだ。

現在、ノーベル賞を授与されているような業績の多くは、一九七〇年代に地道な研究を積み重ねて成し遂げられたものがほとんどである。白川さん、田中さん、野依さん、小柴さんの仕事を思い出してみれば納得できるだろう。少ないとはいえ自由に使える経常研究費があり、時間

## 国語 (その三)

をかけて工夫する余裕があったのだ。科学研究にとって本当に必要なものが何であるかを物語っているのではないだろうか。

科学における「経済論理の貫徹」という趨勢はしばらく続くだろうが、そう長くもないとは思っている。日本は、科学技術基本計画による科学技術振興費の大盤振る舞いで科学に投資(まさに「競争的資金」として)しているように見えるが、科学の研究は金さえかければ実が上がるものではなく(結局、大型装置を買い込んで、ありきたりのデータを取ってルーチ的な論文を書くだけになってしまふから)結果として得られる果実は少ないと予想されるからだ。そのことが判明したときには科学者バッシングが起こるだろう。「こんなに資金を投入したのに、大した成果が出ていないではないか」と。しかし、それは筋違いというもので、金で科学の業績が買えると思ひ込んだのがそもそも間違いであったのだ。とはいえ、科学者も研究費がふんだんに出ることを喜んだ。その挙げ句として惨憺(さんたん)たる状況が見えれば、大きな騒動となることだろう。

となると、科学研究のシステムを変えざるを得なくなるに違いない。科学研究を止めるわけにはゆかないから、それまでとは異なった方式に変えざるを得ないからだ。さて、どのような方向に変わっていくか見当がつかないが、科学者の創造

的精神を尊重する、ゆったりとしたシステムになるはずと考えている。そのような状況が実現すれば、視野が広く、社会と密接した新しい科学者が求められることになるだろう。

冒頭に述べた「若い科学者はさまざまな岐路にさしかかっている」とは、「社会からは視野の広い科学者であることが望まれながら、研究現場からは逆のことが強いられている」、「このような状況が長く続くとは思えないが、といって実りある未来を容易に想像することができない」、というようなジレンマの状態にあることを意味している。(シニアの科学者は、社会の動きに無関心で、競争原理を信じ込んでいる、という抜きがたい心情にあるからジレンマを感じていない。そして、それで自分の時代は過ぎせると思っている。)

若い科学者が抱くジレンマは短時間で解消するとは思えないが、それでも時代の変化が来るときのために心の準備をしておかねばならない。気がつけば、旧時代的な科学者でしかなかったとわかってもう遅いのである。

(池内了『科学者心得帳』による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

## 国語 (その四)

問一 傍線部A「気概」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 自らの品格を保とうとする気持ち。
- ② 困難にもくじけない強い気持ち。
- ③ 自分の思いを押し通そうとする気持ち。
- ④ 自分の関心事へのこだわりの気持ち。
- ⑤ 物事を最後までやり通そうとする気持ち。

問二 傍線部B「科学研究のみに埋没してきた旧時代の科学者像」とあるが、どのような「科学者」は何を行っていたか。本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部C「科学者の数は増加したが、その存在感は薄れている状態なのである」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 自らの研究が社会に大きな問題を引き起こしていることを自覚している科学者は、社会と密接に関わることを避けているから。
- ② 好奇心の赴くまま研究に没頭し

ている科学者は、科学が社会にどのような影響をもたらすのかについては関心がないから。

- ③ 社会には解決すべき問題は沢山あるが、自らの業績を上げることには忙殺される科学者は、それらに積極的に関与できないから。
- ④ 専門職の地位にあっても、科学者も普通の人間に過ぎず、社会的な問題について発言をし、面倒なことに巻き込まれたくはないから。
- ⑤ 社会への貢献を強く求められるが、経済論理に疎い科学者は、研究資金に見合うだけの成果を上げることができていないから。

問四 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 魔の手                      ② 合の手
- ③ 奥の手                      ④ 禁じ手
- ⑤ あの手この手

問五 傍線部D「視野が近視眼的になり」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 他の科学者たちと競争すること  
に意欲を燃やすのではなく、自分

## 国語 (その五)

が関心のあるテーマをひたすら研究するということ。

② 莫大な研究資金を必要とするような実験ではなく、少しの資金でもできるような実験をあえて選んで行うということ。

③ ノーベル賞を授与された人たちの業績を評価することなく、自分の能力で可能である研究を選んで行うということ。

④ 画期的な研究成果を上げようとするのではなく、目先の結果にこだわりの論文を書くこととするということ。

⑤ 長い時間をかけて、地道な実験を積み重ねることなく、抽象的な理論を構築することに一生懸命になるということ。

ずそのお金を確保する才能が必要である。

② 旧時代の科学者と、新時代を生きる若い科学者とは、社会から期待されているものに違いがある。

③ 新時代の科学者は、保守的な思想を持った者が多いために、社会的な問題に関わろうとはしない。

④ 科学者たるものは、自らの知的好奇心を満たすことのために、すべての精力を傾けなければならない。

⑤ 公的資金からの援助を受けて研究しているからには、ひたすら業績を上げるために努力すべきである。

問六 波線部「今、若い科学者はさまざま

な岐路にさしかかっている」とあるが、これはどのようなことを意味しているのか。六十字以内(句読点なども字数を含む)で説明しなさい。

問七 本文の内容と合致するものを、次の

①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 現代の科学を研究するために

は、莫大なお金が必要であり、ま

## 国語 (その六)

**第二問** 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私はあまりテレビを見ないのだが、たとえば、旅先のホテルであったりすると、夜一人で部屋にいて、するべきことも無く、ぼんやりとテレビをつけて過ごす。そうしていて、先日、不思議な番組を見て、IT時代のコミュニケーションについて少し考えさせられてしまった。

「地球アゴラ」という、NHKのBSチャンネルで、日曜日の夕方からやっている番組である。世界のあちこちにいる日本人たちが、「スカイプ」というインターネットを経由するテレビ電話を使って同時に参加する。東京のスタジオを中心にして、各地の日本人が生中継で繋がるのである。

### 【1】

私が見ていたときは、5つの国から出ている。南太平洋と北アフリカと南米と北欧、そして南欧。そのときのテーマはコミュニケーション。ゲストは齋藤孝さん。南太平洋の国では、バスが混んで立たなくてはいけなくなると、座っている他人の膝の上に平気で座るのである。男女関係無く、大きな人の上に小さな人が座っていいらしい。お互いのぬくもりを感じながら、そこから恋が生まれることもあったりするらしい。

北アフリカの国では、①時分時であるこ

ともお構いなしに、平気で知り合いの家を訪ねる。会って話すということがとても重要であり、会えば必ず長居になって、昼ごはんも②イツシヨに食べることになるらしい。画面には、実際に家の中で樂しげに食べている男たちがいた。

南欧の国では、容姿③タンレイであることという条件が堂々と求人広告に書かれ、それは人と会う職業であれば、当然のことであると受け止められているらしい。

### 【2】

それぞれのコミュニケーションの形は大変④イである。人間の可能性のさまざまな姿を見せてくれて、それなりに面白いのだが、それでは、それらをまとめている日本は、どのようなコミュニケーション形態をとっているのか。

コミュニケーションをテーマとするこの番組は、インターネットのテレビ電話という、恐ろしくハイテクな機械を使っている。スタジオとそれらの国の人々は、お互いに見ず知らずの他人なのだ。お互いに打ち解けた様子もない。それぞれの人々が何を話し、どう答えるべきか、明らかに④メンミツな打ち合わせが事前に行われていて、そのとおりの言葉が吐き出されていく。少なくとも彼らは「会っている」ように見えない。それはコミュニケーションではない。この番組のテーマは「コミュニケーション」であるはずなのだが、言葉が並ぶだけで、人間同士の会話が持つ

## 国語 (その七)

生き生きとした新鮮さがまったく感じられない。みなが一□に会しているといっても、画面上に並んでいるだけのことである。生放送のテレビ番組という恐ろしく強い制約があることは仕方がないけれど、それにしても、あまりに不自然なアゴラー「広場」なのである。

その辺の奇妙さを分かっている、なおかつこの番組を作っているのであれば、それはかなり面白いことになるのだろうが、たぶん、制作者にその自覚はない。全地球を結ぶコミュニケーションの場を提供している、ということしか考えていないように思える。

### 【3】

番組についてはともかく、このように、インターネット上でなされるコミュニケーションはあまり嬉しいものとは思われていない。人工的で冷たく空疎である。私がこの番組で感じたのも、そのようなことである。そのような感じ方を言う人は世間にいっぱいいる。

今、画像のともなう電話で会議をしている会社は、少なくないに違いない。しかし、それらは報告事項だけであって、とても大切な事柄は、やはりお互いに会って話し合いたいと思うのではなからうか。それでなければ、なんだか物足りなく、不十分な気がしてしまうのではなからうか。

大学の授業をインターネットで配信するということも行なわれている。しかし

それは大学教育の自殺行為ではないのだろうか。離島などで離れすぎているというのならばともかく、たかだか日本国内で、そんなことをする必要があるのでらうか。

### 【4】

昔、文字が発達したとき、ソクラテスはそれをひどく批判した。『対話篇』に出てくるような人だから、会って話すことに思考の<sup>A</sup>醍醐味を感じるのであり、その醍醐味が書物では失われてしまう。書物は反論しないし、書物は考えを変えようとなし。けしからんというわけだ。

私たちは今、手書きで書かれた手紙というコミュニケーションを、とても人間的で温かみのあるものとして感じている。しかし、考えてみれば、文字の並んでいる紙にすぎない。それが人間的であると感じるのは、それ以後のワープロ印刷の手紙や電子メールと比較するからであって、手紙という通信ツールが出来た当初は、そんなことをするよりも、会って話すほうがずっと楽しく、重みがあると思っていたはずなのだ。

現実にネットは、ネットでなければ決して出会うことのない人が出会うことを可能にしている。多くの人に自分の考えをととても手軽に発信できるのもネットのおかげである。

### 【5】

私たちはIT時代の通信手段について、<sup>B</sup>その欠点だけをあげつらってしまう傾

## 国語 (その八)

向がある。しかし便利であることはたしかだし、一部の人々にとっては、<sup>⑤</sup>極めて人間的な生活を可能にさせる道具でもある。

あまり恐れてはいけないのかもしれない。もう少し成熟してほしいけれど。

(金田一秀穂『金田一家、日本語百年のひみつ』による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字にし、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄イに入れるのに最も適切な語を、本文中から漢字三字で抜き出して答えなさい。

問三 空欄口に入れるのに最も適切な語を、本文中から漢字一字で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部A「醍醐味」の意味として、最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 最高の働き
- ② 決定的な動機
- ③ 本当の面白さ
- ④ 普遍的な価値
- ⑤ 究極の目的

問五 傍線部B「その欠点だけをあげつらってしまおう」とあるが、この「欠点」とはどのようなものか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 次の段落を本文の本来あった箇所に戻す場合、最も適切な箇所を、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

しかし、このような考え方は、コミュニケーションの歴史という点から見ると、実は、とても愚かで時代を理解しない反応であるかもしれないのだ。

- ① 【1】
- ② 【2】
- ③ 【3】
- ④ 【4】
- ⑤ 【5】

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① IT時代のコミュニケーションのツールとして、手紙はもはや過去の遺物であり、用を成すものではない。
- ② ソクラテスが言うように、会って話をすることが大切であって、文字ではコミュニケーションはできない。
- ③ 成熟する必要があるが、インターネット



## 国語 (その九)

ネットにはインターネットの良さがあり、一概に否定するものではない。

- ④ IT時代を迎え、大学の授業もインターネットを通じて行うようにどんどん変わっていくべきである。
- ⑤ 生放送のテレビ番組は、良好なコミュニケーションの場を提供することはさまざまな制約があり不可能である。

## 国語 (その十)

**第三問** 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

最近、「こども食堂」が全国で急速に普及している。地域の貧しい家庭の子どもたちや親が忙しい子どもたちのために、地域の人たちが夕食を無償もしくは安価に提供する食堂である。

相次ぐ規制緩和の連発で経済格差が広がるなか、子どもの貧困がますます深刻化している。子どもの貧困を緩和するために、こども食堂は、国家ではなく、地方自治体でもなく、地域という枠組みで子どもたちの孤食を防ぎ、貧困家庭を援助する役割を果たそうとしている。こうした試みに「公衆食堂」という概念を当て、その歴史的展開と現在の展望をある研究会で発表したとき、ベテランの研究者から、「公共の食堂は国家の手の届かないところを補完するだけであって、その原因となる貧困や労働条件の問題そのものの解決にはならない」という批判を受けた。たしかに、見方によっては国家が進める経済政策、とくに規制緩和の矛盾を緩和する補助機関としてこども食堂を位置付けることも可能かもしれない。実際、地方自治体もこども食堂に援助を与え始めている。だが、<sup>A</sup>わたしのとらえ方は少し違う。こども食堂にみられるような、家族の枠を超えた食のあり方は、人と人の交わる公共空間を活発化し、さらに創造し

ていく<sup>B</sup>ポテンシャルを内包していると思う。純粹に食べものを通じた人と人の結びつき方は、宗教や思想とは異なる可能性をもつ。すでに国家が市場経済の補完でしかない現在、国家が公共空間を設定することは、それこそ道徳的になつてしまえば面白くない。学校の場を離れ、しかも学習塾でもない場所で、人が、ただご飯を食べる、食べさせるという目的だけのために集まる。こんなシンプルなかども食堂の理念を考えると、実はもう、孤食と共食というセットの概念はそれほど役に立たない。そのあいだにある、もっと別の食のあり方を説明する言葉が必要だ。なぜなら、こども食堂は、孤食というには料理する側と食べる側の交流、子どもたちのあいだの交流が豊かである一方で、共食というには紐帯<sup>ちゆうたい</sup>がゆるく、来たいときには来て、来たくなければ来ないというような、共同体意識を醸成するというよりは、食堂に通う子どもたちや大人たちはもう少しドライに、しかし、しっかりとつながっているように思えるからである。

こうしたあり方を、**イ**「縁食」と呼びたい。「ふちしよく」とも読めるが「えんしよく」としておこう。

「公食」という言葉を複数の研究会で提案したことがあったのだが、「公」という言葉にまわりつく「お上」のイメージが拭<sup>ぬ</sup>い難く、評判が<sup>①</sup>芳しくなかった。実際

## 国語 (その十一)

のところ「公」の概念は決してそんな単純ではなく、漢字の成立をたどっていくと開かれた広場の象形文字であることから、個人的にはかなり気に入っていたのだが、広く深く定着してしまったイメージを覆すのはやはり難しい。そこで、ふと浮かんだのが「縁食」という言葉であった。

縁食とは、孤食ではない。複数の人間がその場所にいるからである。ただし、共食でもない。食べる場にいる複数の人間が□を醸し出す効能が、それほど期待されていないからである。

縁とは、人間と人間の深くて重いつながり、という意味ではなく、単に、めぐりあわせ、という意味である。実はとてもあつさりしている。めぐりあわせであるから、明日はもう会えないかもしれない。場合によっては、縁食が縁となつて恋人になつたり、家族になつたりするかもしれないが、いずれにしても、人間の「へり」であり「ふち」であるものが、ある場所の同じ時間に停泊しているにすぎない。これは「共存」と表現すると、ギョウギョウしいだろう。むしろ「並存」のほうがよい。そんなゆるやかな並存の場こそ、今後求められるのではないか。こども食堂と呼ばれているもののユニークさも、この縁食にあるのではないか。ちよつと立ち寄れる。誰かがいる。しかし、無理に話をしなくてもいい。作り笑顔も無用。停泊して

いるだけなので、孤食を存分に楽しんで、ちよつと掲示板を眺めて、星でも眺めながら帰ってもいい。代金は数百円、または無料。そんな食のあり方をきちんと説明してこなかったのは、概念いじりをハとする研究者の怠慢だとわたしは思うのである。

縁食は、貧困に対し即効性のあるものではない。ましてや、縁食は、セイフティネットを一挙に強化するものでもない。だが、縁食の最大の特徴は、そのゆるやかさとしなやかさである。これらこそ、災害列島でも効力を発揮するはずである。縁食は、困っている人のみならず、困っていると言い出しにくい状況にある人や、困っている現状を把握できにくい人にとつてもシキイがとても低い。しかも、縁食は、融通が効きやすい。相手を見て、メニューを変えることもしやすい。声もかけやすい。毎回の参加を強要はしない。タブー食もないが、c. タブーのある人間に気を遣うことは比較的難しくない。あくまでマグネットにすぎない。マグネットはしかし、食という人間の根源であるから、磁力は強く、また変動も少ない。

地方の政治の役割は、この磁場を制度化するのではなく、無駄なアドバイスをすることではなく、「へり」なり「ふち」からサポートすることに限るべきだろう。恒常性よりは弾力性が必要であるため、解消もしやすいほうがよいから、変に行

## 国語 (その十二)

政計画に組み込むとやっかいである。企業<sup>⑤</sup>シヨウチによって食堂を作るのではなく、あくまでも税金を使ったサポートに徹する。税金は、つぶれた企業を救ったり、人が公共的な活動をしにくい巨大な公共施設を作ったりするのではなく、こんな縁づくりの試みのために使われると心地よいとわたしは思う。

(藤原辰史「縁食論——孤食と共食のあいだ」による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

れなくなっているものととらえている。

- ③ こども食堂を、学校とか学習塾とは異なり、子どもたちが運営を行い、自主性を高めていくことができるところととらえている。
- ④ こども食堂を、あつさりとした関係でありながら、しなやかなつながりをもつセイフティネットになれるものとしてとらえている。
- ⑤ こども食堂を、孤食とも共食とも違っていて、いつも同じものを、同じ人たちとともに食べることができるところととらえている。

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字にし、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

問二 傍線部A「わたしのとらえ方は少し違う」とあるが、「わたし」はどのようにとらえているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① こども食堂を、子供の貧困を緩和することを目的とするだけではなく、ともに食きずなべることで強い絆きずなを形成するところととらえている。

② こども食堂を、全国に急速に普及しているが、地方自治体が支援をはじめて、当初の目的が達成さ

問三 傍線部B「ポテンシャル」の意味として、最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 主体性                      ② 情報伝達
- ③ 世界観                      ④ 潜在能力
- ⑤ 合理主義

問四 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① さしあたり                      ② つとに
- ③ ちなみに                      ④ できるだけ
- ⑤ ことごとく

## 国語 (その十三)

**問五** 空欄口に入れるのに最も適切な語を、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

⑤ 縁食は、食事にやって来た人に応じて、料理の内容や種類を柔軟に変更することが可能であるから。

**問六** 空欄ハに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

**問八** 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 実態
- ② 趣味
- ③ 生業
- ④ 得意
- ⑤ 天職

① 共食でも孤食でもない縁食が全国に広く普及していくことで、現代日本の抱えている様々な問題は、一挙に解決へと向かっていく。

**問七** 傍線部C「タブーのある人間に気を遣うことは比較的難しくないとあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

② ただ食べさせるといった目的をもつ子ども食堂であるが、人と人の深く重い絆を作る役割も果たしていくことが期待されている。

- ① 縁食は、地方自治体が税金を使ってサポートしてはいるが、制度化がなされているわけではないから。
- ② 縁食は、食べることに困っている人を引き付ける力が強いわけではないが、自由さは持っているから。
- ③ 縁食は、代金は無料か、払ったとしても数百円であり、食わずに残しても気にならない額であるから。
- ④ 縁食は、宗教に寛容な人が関わっており、何事も拒むことなく受容

③ 規制緩和により広がった経済格差を解消するための方法として、子ども食堂が、政府主導により、全国各地で広がってきている。

④ 縁食とは、すでに関係がある人たちだけでなく、今まで縁もゆかりもなかった人たちとも、場所と時間を共有する場である。

⑤ 子ども食堂に通う子どもたちや大人たちは、他者とコミュニケーションを取らないため、他者とのつながりができることはない。